複合性歯牙腫 26 例の臨床的考察

久野吉雄・比嘉実盛・高橋秀太郎・本多洋之

Clinical studies on cases of compound odontoma

Yoshio HISANO・Jitsusei HIGA・Hidetaro TAKAHASHI・Hiroyuki HONDA

はじめに

歯牙腫は1821年 Oudet により初めて報告されたといわれ、Broca, Bland-Sutton, Bennett, Perthes, 塚野らは独自の立場より、これを種々に分類しており、以来、歯牙腫については多数の報告がみられる。

私共は昭和42年日本口腔外科学会関東地方会72回例会において、複合性歯牙腫7例について報告したが、このたびはさらに同様な症例を追加し、26例について臨床的に検討を試み、さらに本邦の文献より蒐集し得た複合性歯牙腫22例についても比較検討を行なったので報告する。

表 2 性 別

文 献

22 例においても男性 14 例 63.6%，女性 8 例 36.4%で、男性対女性の比は 1.8：1 であり（表 2）、本学症例、本邦文献症例共にやや男性に多くみられた。

1. 資 料

昭和37年4月から昭和46年4月までの9年間にわれわれが経験した複合性歯牙腫26例ならびに最近15年間に本邦の文献より蒐集し得た複合性歯牙腫22例について、性別、年齢別、主訴、部位別、埋伏歯との関係、歯牙腫の処置、石灰化塊の数などについて検索を試みた。

2. 性 別

まず性別について観察してみると、本学症例における26例では男性がわずかに優り14例53.8%，女性12例46.2%を示し、男性対女性の比は1.2：1であった（表1）。また、本邦文献症例

表 1 性 別

本 学

本 学

であり、最も多いのは20歳代の12例46.1%，次いで10歳代6例23.1%，30歳代4例15.4%の順であった（表3）。

文献症例における22例では最低年齢7歳，最高年齢55歳であり，最も多いのは10歳代の9例40.9%，ついで20歳代8例36.6%，10歳未満2例9.0%となっており（表

日本歯科大学口腔外科学教室（主任：宇賀春雄教授）
Department of Oral Surgery, Nippon Dental College.
(Chief: Prof. Haruo Uga)
受付昭和47年5月20日

表 4 年 令

文 献

4), 本学, 文献症例共に 10～20 歳代に半数以上が受診している。

なお, 本学症例ならびに文献症例中年齢と性別の関係においては, 本学症例では 20 歳代に 2 例 7.7%, 文献症例においては 10 歳代 5 例 22.7% と男性に多く観察されたが, 他の年齢層においてその差はほとんど認められなかった。

4. 主 訴

次に患者の主訴について観察してみると, 本学における 26 症例中 20 例 76.9% は炎症症状なく, 永久歯の未萌出, 乳歯の残存, 無痛性膨隆などを主訴に来院しており (表 5), 文献症例においても 22 例中 17 例 77.2% がこれらのことを主訴に来院している (表 6)。

表 5 主 訴

本 学

5. 歯牙腫の存在部位

歯牙腫の存在した部位を観察してみると, 本学の 26 例では前歯部に発生したものが最も多く 20 例 77.0% であり (表 7), 文献症例における 26 例でも, 14 例 53.8% が前歯部に発生している (表 8)。また, 上下顎の関係においては本学症例では, 26 例中上顎に発生したものが 18 例 69.2% であり上顎に多くみられたのに対し, 文献症例では 26 例中 13 例 50.0% と上下顎に差は認められなかった。

6. 埋伏歯との関係

歯牙腫の存在する部位にはしばしば埋伏歯の存在することが報告されており, 歯牙腫と埋伏歯との関係についても観察したところ, 本学の 26 例においては 18 例 69.2% が歯牙を有しており, その数は 19 歯であった (表 9)。また, 文献症例の 26 例でも 18 例 69.2% が歯牙を有しており, その数は 23 歯であった (表 10)。なお, 本学症例では 1 歯牙腫の部位に 2 個の埋伏歯のみられた 1 症例があり, 文献症例においては 1 歯牙腫の部位に 2 個の埋伏歯を有する 3 症例と 3 個の埋伏歯を有する 1 症例がみられたが, 1 歯牙腫附近に 1 歯の埋伏歯の存在が最も多かった。

7. 歯牙腫の処置

これら歯牙腫の処置に関しては, 本学症例に

表 6 主 訴

文 献

においては未処置のもの 2 例を除いて, 24 例に摘出手術がなされており, 埋伏歯を有した 17 例では歯牙腫のみ摘出して, 埋伏した歯牙を開窓し, 歯列に誘導したものが 2 例あり, これらを除きあとの 15 例は埋伏歯と共に摘出がなされている (表 11)。また, 文献症例において埋伏歯を有した 18 例中 1 例に開窓法が行なわれているのみで, 他は埋伏歯の抜去と共に歯牙腫の摘出がなしている (表 12)。

8. 石灰化塊の数

摘出された歯牙腫の石灰化塊の数は 1 塊として摘出され, それを分離することのできなかったものは 1 個として算定したところ, 本学症例においては 1～9 個のものが 24 例中 10 例 41.7% と最も多く, 10～19 個が 9 例 37.5% とこれについている (表 13)。さらに文献症例においても 26 例中 1～9 個のものが 15 例 57.8% と最も多く, 10～19 個のものは 5 例 19.3% とこれについている (表 14)。なお, 最も多数の石灰化塊のみられたものは本学症例では 64 個であり, 文献症例においては 66 個であった。

考 按

歯牙腫はその形状, 大小, 組織的構造などが不定であるためその分類もさまざまである。私共は歯牙腫を Perthes の分類にしたがい複合性歯牙腫のみについて本

表 7 歯牙腫の存在部位

表 9 埋伏歯との関係

表 8 歯牙腫の存在部位

表 10 埋伏歯との関係

表 11 処 置

表 12 処 置

表 13 摘出歯牙様石灰化物の個数

表 14 摘出歯牙様石灰化物の個数

学口腔外科を訪れた26例ならびに本邦文献より蒐集し得た22例について、その性別、年齢、発生部位、埋伏歯の有無、摘出した石灰化塊の個数など、臨床的所見のみについて検討を加えた。

なお、本学症例の数例については宮里が病理学的見地より検討している。

まず、歯牙腫を有した患者の性別について観察してみ

ると、全歯牙腫の発現率は石井によると男性58.8%、女性41.2%で男性にやや多いと報告しており、塚野は男性42.9%、女性57.1%でやや女性に多いとしている。

このたびの複合性歯牙腫のみについてこれらの報告と比較してみると、本学症例では男性53.8%、女性46.2%、文献症例においては男性63.6%、女性36.4%とともに男性に多く、石井の報告に一致しており、男女間の差は文献症例のみに大きくみられた。しかし複合性歯牙腫の発現と性別との間には諸家の報告同様特殊な意義は見出し得なかった。

ついで、歯牙腫を有した患者の受診時年齢について検討してみると、全歯牙腫を対照とした石井は13~30歳58.8%、塚野は21~30歳50.0%が最も多かったと述べている。

複合性歯牙腫のみを対照とした本学症例においては、20歳代が46.1%と最も多く、ついで10歳代23.2%、30歳代15.4%であり、文献症例においては10歳代40.9%、20歳代36.6%、10歳未満のもの9%の順で、本学症例、文献症例とも10~20歳代に70%前後が来院している。なお、年齢と性別の関係において男女の差が2例以上みられた年代は、本学症例では10歳未満、20歳代の各2例7.7%、文献症例では10歳代5例22.7%であり、10~20歳の年代の男性に多く発現していた。また、本症のため来院した最低ならびに最高年齢は本学症例においては最

低6歳、最高66歳、文献症例では最低7歳、最高55歳であった。

ついで複合性歯牙腫を有した患者の来院時の主訴について考察してみると、塚野、大井は歯牙腫を有した全患者の70%に感染を伴っていると述べているのに反し、複合性歯牙腫のみについて観察した本学症例においては、感染を伴ったものは23.1%、文献症例では22.8%とわず

かな数値であり、70%以上が炎症症状を欠いていた。このように炎症症状を伴った本症の少なかったことは、塚野が集計した昭和12年頃より、口腔衛生に対する一般の人々の認識が高くなっているものと考えられた。

ついで、歯牙腫の発生部位を先ず上下顎について観察してみると、全歯牙腫について観察した塚野は上顎51.1%に対し、下顎48.9%で上顎にやや多いとしており、同じく全歯牙腫について観察した石井は上顎28.6%に対し、下顎71.4%で下顎に多いと報告している。

私共の蒐集し得た本邦文献の複合性歯牙腫のみについては上下顎とも50.0%と差はなく、本学症例においては上顎69.3%、下顎30.7%と上顎に多くみられた。

さらに発生部位を前歯部、小白歯部、大白歯部の三群に分けその関係についてみると、全歯牙腫を対照とした塚野は、下顎大白歯部35.0%、上顎大白歯部30.0%、上顎前歯部20.0%の順を示したと述べている。これに対しこのたびの複合性歯牙腫のみを本学症例について観察すると、第一位は上顎前歯部で69.3%、ついで下顎小白歯部の19.2%、下顎前歯部7.7%の順であり、文献症例においての第一位は上顎前歯部の34.6%であり、ついで下顎大白歯部23.2%、下顎前歯部19.2%の順を示していた。

このように上下顎における発生部位の比較においてはかならずしも下顎に頻発するとはいいがたいように思われたが、これを部位別に観察してみると、全歯牙腫をみた場合には上下顎大白歯部に好発しているが、複合性歯牙腫のみの場合には上顎前歯部に好発するように思われた。なお、文献症例中1個体に5個の歯牙腫を有したのもみられた。

歯牙腫と埋伏歯との関係については、複合性歯牙腫の存在する附近にはしばしば埋伏歯の存在することが報告されており、この件に関しても調査したところ、本学症例においては複合性歯牙腫26例中18例69.2%に歯牙の埋伏がみられ、文献症例においても26例中18例69.2%に歯牙の埋伏がみられた。なお、埋伏した歯牙の本数は1歯牙腫附近に2歯の埋伏歯を有したものが本学症例に1例、文献症例において3例みられ、さらに3歯の埋伏を有したものの1例が文献症例にみられた。

ついでその処置であるが、塚野は原因歯牙の種類、発生部位、方向、大きさ、形状、歯牙の欠如などを勘案しその術式を選択すべきであることを強調しているが当然のことであり、いわゆる埋伏歯の開窓誘導法の試みられたものが本学症例では2例に、文献症例では1例にみられ、埋伏せる歯牙の保存の困難さを示しているように思われた。

摘出された歯牙腫の石灰化塊の数について、塚野氏の分類による集合歯牙腫のみ7例についての観察で3~10個のものが4例であり、その数は80個がもっとも多かったと述べている。

このたび私共は石灰化塊の数を、そのものが分離する

ことのできなかったものは1個として算定したところ、本学症例では1~9個が最も多く41.7%、ついで10~19個のものであり37.5%で、その数は66個が最も多かった。また、文献症例においても同じく1~9個のものが最も多く57.8%、ついで10~19個のもの19.3%であった。

む す び

(1) 複合性歯牙腫の発生と性別との関係は、ごくわずかではあるが男性に多くみられた。

(2) 複合性歯牙腫と来院時年齢との関係は、本学症例、文献症例共に10~20歳代に70%前後が来院している。

(3) その主訴は本学症例、文献症例共に70%以上が炎症々状なく永久歯未萌出、乳歯残存、膨隆などを訴えて来院していた。

(4) 複合性歯牙腫は本学症例、文献症例共に上顎前歯部に多くみられた。

(5) 80%以上の歯牙腫に埋伏歯の存在がみられ、1歯牙腫附近に2歯の埋伏歯のみられたものも存在した。

(6) 処置としては特に埋伏歯を有する複合性歯牙腫に対し、いわゆる開窓誘導法の行なわれた症例がみられた。

(7) 摘出石灰化塊は1~19個のものが最も多かった。

以上、私共は Perthes の分類による複合性歯牙腫について臨床的見地より集計、観察を試みたので報告した。

本論文の要旨は昭和46年10月、第16回日本口腔外科学会総において発表した。

文 献

- 1) 塚野多四郎：オドントーム(硬性歯牙腫)の60例に関する臨床的研究。大日本歯科学会雑誌 86：39-72 & 192-231 1937.
- 2) 石井 正：歯系腫瘍に関する研究。大日本耳鼻咽喉科会報 33：42~106 1928.
- 3) 宮崎吉夫他：口腔病理学、永末書店、京都、1961.
- 4) 石川梧郎：歯原腫瘍について。口病誌 27：1~16 1969.
- 5) 筒井英夫他：3例の歯牙腫について。口外誌 1：16-18 1955.
- 6) 長尾喜景他：上下顎に多発した集合性歯牙腫の1例。口外誌 2：82-84 1956.
- 7) 大矢謙造他：オドントーム3例。口外誌 2：19-21 1956.
- 8) 恩田一呂他：骨組織を含む Odontoma の1例。口外誌 3：170-171 1957.
- 9) 高倉和夫他：複合性歯牙腫の一例。口病誌 26：355-359 1959.
- 10) 塩田正久他：上顎前歯部に発生した複合性歯牙腫の1例について。口外誌 5：35-36 1959.
- 11) 森 享三郎他：上顎左側前歯部にみられた複合性歯牙腫の1例。口外誌 8：638 1959.
- 12) 高橋健次郎他：巨大なる歯牙腫の1例。口外誌 5：62-64 1959.
- 13) 東 勇他：下顎切歯部の複合性歯牙腫の1例。口病誌 27：158-162 1960.
- 14) 長坂 甫他：複合性歯牙腫の2例。臨床歯科 231：29-32 1961.
- 15) 内藤 清他：上顎の複合性歯牙腫の1例。口外誌 9：36-39 1963.

- 16) 佐藤 匠他：大きな複合性歯牙腫の1例。京大口科紀要 5：24-30 1965.
 - 17) 早川桂三他：高令者に発現した歯牙腫の1例。口外誌 11：104-107 1965.
 - 18) 堀田 一他：歯牙腫の6例について。日口科誌 15：395-402 1966.
 - 19) 佐藤 武他：上顎右侧犬歯部に認められた複合性歯牙腫の1例。臨床歯科 254：27-28 1966.
 - 20) 岡野光雄他：複合性歯牙腫の1例。日口外誌 14：103-105 1968.
 - 21) 浜田義彦他：歯牙腫の1例について。日口外誌 14：35-38 1968.
 - 22) 高橋昌士他：下顎小臼歯部に発生した巨大な複合性歯牙腫の2例。日口外誌 15：106-110 1969.
 - 23) 増田敏雄他：混合性合成歯牙腫の1例。日本歯科評論 317：49-51 1969.
 - 24) 瀬尾永樹他：巨大な Odontoma の1例。日口外誌 16：351-363 1870.
 - 25) 大井 清：口腔外科学, p. 137-140 永末書店, 京都, 東京, 1960.
-